

青森市内の「天和書上絵図」について

― 明治期に書写された近世資料の一断面 ―

工 藤 大 輔

はじめに

天和四年（一六八四・貞享元）正月二四日、弘前藩は領内の各村へ村況調査を命じ、村ごとに「御蔵給地田畑屋鋪其外諸品書上帳」（以下、「書上帳」と略記する）を作成させた。⁽¹⁾そして、ここで得られたデータをもとにして、各村では「天和書上絵図」（以下、「書上絵図」と略記する）を作成することになった。もちろん、「書上絵図」にはその作成のための詳細な仕様書があり、それにしたがって津軽領内全域で絵図が作成されることになった。⁽²⁾

長谷川成一氏の研究によれば、⁽³⁾「書上絵図」は一村につき二点ずつ存在し、藩庁の勘定所地方席に正本の本図が保管され、もう一点は、庄屋の手に控図として保管された。そして、本図の方は、明治維新の後、青森県庁（以下、「県庁」と略記する）へ引き継がれ、その後青森県立図書館へ移管された。このほかに、一部村役場で保管したものもあるようである。しかし、残念なことに、青森県立図書館の書庫は、昭和二〇年（一九四五）七月の青森空襲の際に焼失し、再度県庁に移転したものの、翌年十一月に今度は県庁が火災に遭い、これら「書上絵図」の本図

は灰燼に帰してしまったという。このときの火災について、昭和二十一年十一月二六日付の地元新聞『東奥日報』紙は、当時の館長の談話とともにつぎのように伝える。⁽⁴⁾

国宝級書籍焼く

県図書館の損害八十万円

県立図書館は二つの書庫を有してゐたが、一つを戦災で失ひ、残る一つを今回県庁の火災で類焼してしまつた。前回戦災を免□□大英百科事典等の基本図書約□万冊、及び同館が十数年間纏めた郷土資料一万一千冊□の他、雑書籍を合して合計六万冊、時価にして約八十万円□を焼失した。このうち、国宝級の書籍は天和画帳・松十文庫・藤田文庫・源氏物語・湖月抄等六千冊で、郷土資料一万冊はついで一週間前疎開先から搬入したものである。

吉岡館長談 子供を失つたより残念です。私が駆けつけた時は庁舎の大半が焼失し、書庫へ入ること□出来ませんでした。これも天災で仕方がありませんが、しかし、本県文化復興のため篤志蔵書家の寄附を熱望する次第です。

この新聞記事によれば、青森県立図書館には二つの書庫があり、一つ

表1 「天和四年村書上図写」に綴られている青森市内関係絵図

| 絵図名 | 日付 | 備考 |
|------------------|-----------|--|
| 茂屋村書上図 | 天和4年3月12日 | 家数40軒 18軒雲谷牧新田 14軒大畑ヶ沢牧新田 8軒タモ木野牧新田 |
| 牛館村 | 貞享元年3月18日 | 庄屋小左衛門 |
| 上四ッ石村 枝村下四ッ石村 | 貞享元年4月3日 | 家数28軒 13軒本村屋敷 18軒枝村屋敷 庄屋左助 同四郎兵衛 |
| 合子沢村 | | 家数30軒 18軒本村屋敷 庄屋惣重郎 12軒枝村屋敷 庄屋彦左衛門 |
| 横内村 枝村松野大漆新田 | 貞享元年4月16日 | 家数50軒 本村屋敷36軒 枝村屋敷14軒 庄屋七左衛門・八十郎 |
| 野崎村 枝村野尻新田 | 貞享元年3月25日 | 家数63軒 12軒本村屋敷 51軒枝村屋敷 本村庄屋彦右衛門 枝村庄屋惣左衛門 |
| 石江村 | | 庄屋仁右衛門 |

は青森空襲、もう一つはこの時の火災で焼失してしまったようである。しかし、「類焼」した書庫の所在が図書館内なのか県庁内なのかというところまでは分からない。ただ、いずれにしても、ここに見える「天和画帳」が、「書上絵図」を指すものと思われ、六万冊の書籍とともに焼

失してしまったことだけはいえるようである。したがって、現在確認できる「書上絵図」は、一つには、たとえば、尾崎組の岩館村（現平川市）では、天保三年（一八三二）に藩庁から借用し写図を作っているように、^⑤本図の写しとして残されているばあいがある。もう一つには、藩政時代に庄屋に保管されていた控図と、その写しである。そして、現在各自治体史で紹介されている「書上絵図」は、後者の庄屋保管分のものであると考えられている。^⑥

さて、青森市内に関する「書上絵図」は、長谷川氏の作成したリストによると（以下、「リスト」とする）、^⑧旧八木橋文庫蔵絵図模写の中に、横内村・野崎村・茂屋（雲谷）村・上四ッ石村・合子沢村の五か村分の模写図があるとされている。そして、この旧八木橋文庫蔵絵図模写は、一時青森県立郷土館に保管されていたが、現在は所在不明となっている。^⑨

二〇〇一年（平成十三）八月に青森市史編さん室が、青森県立郷土館で資料調査をした際、「天和四年村書上図写」という資料から、青森市にかかわる、茂屋（雲谷）村・牛館村・上四ッ石村・合子沢村・横内村・野崎村・石江村の七か村分の絵図の写真を撮影した（表1）。この「天和四年村書上図写」というのは、これらが収められている袋の上書によれば、十七点の絵図が一綴りとなっているもので、筆者は「各村庄屋」となっている。さらに、この袋の上書には、青森市外の村々では「長峰村・切明村・唐竹村・広舟村・小国村・新館村・高樋村・垂柳村・苦木村・上湯口村・碓関村」などの絵図も綴られているとある。これらを「リスト」と比較してみると、野崎村などで若干家数の数値などに違いが見られるものの、「リスト」のNo.41「長峰村絵図模写」からNo.52「茂屋（雲谷）村絵図模写」までと、No.64「上四ッ石村絵図模写」・No.65「合子沢村絵図模写」の少なくとも十四点は、この「天和四年村書上図写」にほぼ一致するのではないかと推測される。^⑩

さて、小稿では、右に紹介したものの以外に確認することができた、数点の青森市内の「書上絵図」について、その伝来のあり方を中心として考察を進めていくことにしたい。その前に、まずは「郷土誌」「町村

誌」に掲載された「書上絵図」を、可能な限り拾ってみることにしよう。

一 「郷土誌」「町村誌」のなかの「書上絵図」

表3は、青森市域の「郷土誌」「町村誌」などに取り上げられている「書上絵図」を一覧にしたものである。以下、この表に基づきながらはなしを進めていくことにする。

まず、発刊年が最も古いものでは、大正三年（一九一四）に発刊された『筒井村郷土誌』⁽¹⁾に、幸畑村・上浦町村・浜田村・仲崎村の四か村の「書上絵図」のスケッチが掲載されている。仲崎村は筒井村の古名で、「筒井村と称したりしは宝暦年度以後なりとす」とある。しかし、それ以前の、貞享元年（一六八四）に着手された貞享検地に基づいて、貞享四年に作成された、いわゆる「貞享の検地帳」（以下、「検地帳」と略記する）にすでに筒井村の名前がみえている⁽²⁾。

幸畑村の「書上絵図」によると、枝村として幸畑地子新田と深持漆新田がある。また、上浦町村にも上浦町村・小橋村・勝田村を枝村としていた。さらに、これらの村々の沿革についての記述の典拠として、「検地帳」とともに、たとえば、幸畑村では「貞享元年御蔵給地書上帳」「同年御蔵給地畑屋敷其外諸品書上帳」「天和四年地子新田屋敷書上帳」「貞享元年新田屋敷書上帳」などの「書上帳」があげられている。こうした「書上帳」は現在その所在は確認されておらず、当時村役場などに保管されていたものなのか、もしくは県庁で保管されていたものを借覧したのかどうかすら分からない。

表2 『荒川村沿革誌』にみえる「書上絵図」

| 絵図名 | 日付 | 備考 |
|-----------|-----------|---|
| 荒川・八ツ役書上図 | 貞享元年4月5日 | 本村荒川村50軒 枝村八ツ役村28軒 庄屋四五左衛門・庄屋忠右衛門 |
| 金沢書上図 | 貞享元年5月15日 | 家数20軒 庄屋藤左衛門 |
| 大別内書上図 | 貞享元年4月5日 | 大別内本村12軒 松新田6軒 庄屋次郎左衛門・新田庄屋三五郎 |
| 滝ノ沢書上図 | 天和4年3月15日 | 上下に分れ 家数13軒 庄屋助右衛門 |
| 柴橋書上図 | 貞享元年4月9日 | 本村14軒 枝村中村新田3軒 庄屋小三郎・枝村庄屋弥左衛門 享保13年野木村と改む |
| 上野村書上図 | 貞享元年3月17日 | 本村10軒 茂谷牧新田の者2軒 庄屋長兵衛 |

また、昭和八年（一九三三）に発刊された小友叔雄編『荒川村沿革史』⁽³⁾巻一・二には、荒川村・金浜村・大別内村・滝ノ沢村・柴橋村・上野村六か村の「書上絵図」の村方の書上げ部分が掲載されている（表2）。このうち、「貞享元年四月九日柴橋村書上図」として掲載されている柴橋村は、かつて野木村と称しており、貞享検地に際して柴橋村と一旦改称し、その後享保十一年（一七二六）の郷村改のときに再び野木村と改称しているという⁽⁴⁾。

したがって、この絵図が描かれた貞享元年四月九日段階では、まだ野木村と称しているはずである。さらに、この書上げには「享保十三年野木村と改む」ともあることから、こうした記述が『荒川村沿革史』編者の手によるものではなく、「書上絵図」そのものに書き込まれていたものと仮定すれば、『荒川村沿革史』に掲載されている柴橋村の「書上絵図」は、享保十一年の郷村改以後に写されたものであろうと推測できる。し

表3 「郷土誌」「町村誌」にみえる「書上絵図」

| 組名 | 村 名 | 日 付 | 備 考 | 典 拠 | 刊行年 |
|-----|-------|-----------|------------------|--------------------------|------|
| 浦町組 | 上浦町村 | 貞享元年4月20日 | | 筒井村郷土誌 | 1914 |
| | | 貞享元年4月20日 | | 筒井町誌 | 1965 |
| | | 貞享元年4月20日 | 『筒井町誌』の図版のトレース図カ | 筒井町・青森市合併三十周年記念誌 語りつぐわが町 | 1985 |
| | 浜田村 | 天和4年3月10日 | | 筒井村郷土誌 | 1914 |
| | | 記載なし | | 筒井町誌 | 1965 |
| | | 記載なし | 『筒井町誌』の図版のトレース図カ | 筒井町・青森市合併三十周年記念誌 語りつぐわが町 | 1985 |
| | 雲谷村 | 元和4年3月12日 | 元和は天和の誤記カ | 横内村誌 | 1955 |
| | | 元和4年3月12日 | 部分カ | 高田町誌 | 1966 |
| | 合子沢村 | 記載なし | | 横内村誌 | 1955 |
| | 牛館村 | 貞享元年3月18日 | | 横内村誌 | 1955 |
| 油川組 | 新町野村 | 天和4年3月11日 | | 横内村誌 | 1955 |
| | (孫内村) | 記載なし | 天和のころとの注記 | 滝内町誌 | 1966 |
| 横内組 | 横内村 | 貞享元年4月16日 | | 横内村誌 | 1955 |
| | 野崎村 | 貞享元年3月25日 | | 横内村誌 | 1955 |
| | 四ッ石村 | 貞享元年4月2日 | | 横内村誌 | 1955 |
| | 松森村 | 貞享元年4月5日 | | 青森市東部町誌 | 1965 |
| | 柏木新田村 | 貞享元年4月25日 | | 青森市東部町誌 | 1965 |
| | 上浜館村 | 天和4年3月14日 | | 浜館町誌 | 1965 |
| | | 天和4年3月14日 | 『浜館町誌』から転載カ | はまだて物語 | 1985 |
| | 下浜館村 | 記載なし | | 青森市東部町誌 | 1965 |
| | 中浜館村 | 記載なし | | 青森市東部町誌 | 1965 |
| | 仲崎村 | 貞享元年4月25日 | 筒井村の古名 | 筒井村郷土誌 | 1914 |
| | | 貞享元年4月25日 | | 筒井町誌 | 1965 |
| | | 貞享元年4月25日 | 『筒井町誌』の図版のトレース図カ | 筒井町・青森市合併三十周年記念誌 語りつぐわが町 | 1985 |
| | 幸畑村 | 貞享元年3月18日 | | 筒井村郷土誌 | 1914 |
| | | 貞享元年3月18日 | | 筒井町誌 | 1965 |
| | | 貞享元年3月18日 | 『筒井町誌』の図版のトレース図カ | 筒井町・青森市合併三十周年記念誌 語りつぐわが町 | 1985 |
| | 諏訪沢村 | 貞享元年3月15日 | | 原別町誌 | 1964 |
| | | 貞享元年3月15日 | 原図彩色・模写 | 原別百年のあゆみ | 1990 |
| | 田屋敷村 | 貞享元年3月18日 | | 浜館町誌 | 1965 |
| | | 貞享元年3月18日 | 『浜館町誌』から転載カ | はまだて物語 | 1985 |
| | 沢山村 | 貞享元年4月1日 | | 浜館町誌 | 1965 |
| | | 貞享元年4月1日 | 『浜館町誌』から転載カ | はまだて物語 | 1985 |
| | 蔵沢村 | 貞享元年4月15日 | | 浜館町誌 | 1965 |
| | | 貞享元年4月15日 | 『浜館町誌』から転載カ | はまだて物語 | 1985 |
| | 駒籠村 | 貞享元年3月20日 | | 浜館町誌 | 1965 |
| | | 貞享元年3月20日 | 『浜館町誌』から転載カ | はまだて物語 | 1985 |
| | 戸山村 | 貞享元年3月17日 | | 浜館町誌 | 1965 |
| | | 貞享元年3月17日 | 『浜館町誌』から転載カ | はまだて物語 | 1985 |
| | 原別村 | 貞享元年3月カ | 個人所蔵資料 | 原別百年のあゆみ | 1990 |

かし、そのほかの五か村、さらには前述の『筒井村郷土誌』に掲載されている四か村、計九か村の「書上絵図」については、その原図となった絵図の手がかりは、残念ながらまったくもって不明である。

さらに、昭和三〇年代から四〇年代初めにかけて、鈴木政四郎氏が著して「郷土考古学研究同志会」が発行した、青森市内旧町村の「町村誌」に「書上絵図」のスケッチが多数掲載されている。これらのスケッチのなかには、『滝内町誌』に掲載されている孫内村まじないの絵図のように「書上絵図」と確定するにはいささか疑問があるもの（表3）、また、『高田町誌』に掲載されている雲谷村の絵図のように「書上絵図」をスケッチしたとは思われるが、「書上絵図」全体ではなく部分図であるばあいもあるようである。そして、これらの絵図の原図も、現在どうなっているのかは把握できてはいない。ただ、少なくとも、昭和四〇年（一九六五）ころまでは、二〇か村程度の「書上絵図」の写しが何らかの形で存在していたことがうかがわれる。そして、これらの「郷土誌」「町村誌」では、それぞれの町村の沿革を記述するのに際して、「書上絵図」「書上帳」さらには、「検地帳」を基礎資料としていたということができる。

こうした「町村誌」に掲載された絵図のほかに、原別村はらべつ村制施行百年記念誌編『原別百年のあゆみ』に掲載されている絵図は、個人の方の所蔵にかかるもので、書写年代は少なくとも明治以降であると思われる。後述するように、原別村では明治三〇年（一八九七）に、県庁に備え付けられている「書上絵図」を書写しているので、このときの絵図を写したという可能性はあるが、詳細については分からない。

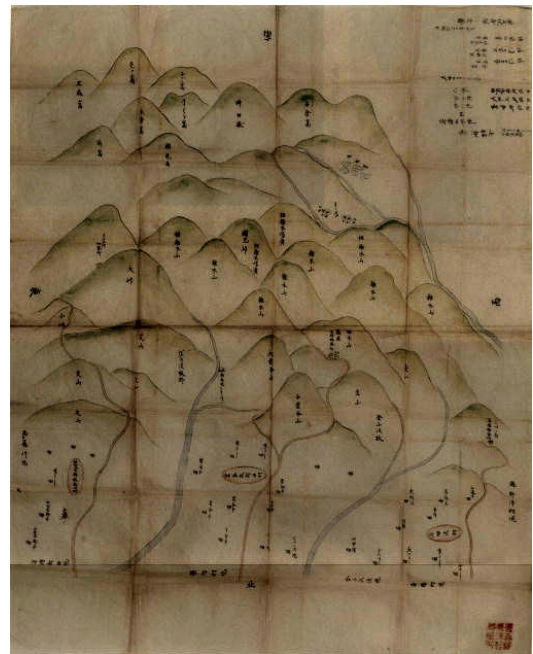


図1 雲谷村「書上絵図」
（雲谷財産区史編纂委員会『おやすの里』より転載）

また、「書上絵図」の作成は、天和四年正月二四日に絵図の作成が藩庁から指示されてから二か月以内、すなわち、二月―三月にかけて作成されることが多いといわれる。¹⁵しかし、表1―表3に見られる青森市内の村々「書上絵図」に関していえば、二月に作成されたものはないように、三月―四月にかけて作成されている。

さて、表3にはあえて載せなかったが（表4参照）、雲谷財産区の創立五〇周年を記念して編まれた『おやすの里』¹⁶に、雲谷村の「書上絵図」の写真が掲載されている（図1）。さきに述べた『高田町誌』に掲載されている雲谷の絵図の部分図は、この絵図の右下部分（小畑沢村おはたけさわむら周辺）のスケッチであると考えられる。そして、この絵図は明治三〇年九月に渋谷代太郎という人物によって謄写されたものであることが判明

する(図1右上方)。じつは、青森市内で確認できた「書上絵図」は、この雲谷の絵図とおなじく明治三〇年に謄写されたものが多い。つぎに、これら明治三〇年に謄写された「書上絵図」についてみていくことにしよう。

二 明治三〇年に謄写された「書上絵図」

表4-①にあげたように、雲谷村・高田村・野沢村・原別村(図2)・^{さざいし}笹石(久栗坂)村の五か村分の「書上絵図」を確認することができた。これらは、いずれも明治三〇年(一八九七)に謄写されたもので、九月―十一月にかけて作成されている。また、これらは県庁に「備付」られたものを謄写したものであり、かつて藩庁に保管されていた本図から写されたものであることが判明する。さらに、原別村の「書上絵図」には「書上帳共」に謄写したという書き入れがあるように、「書上帳」などもこのとき同時に書写されたことが分かる。笹石(久栗坂)村においても、「旧記共」という書き入れがあり(後掲図3左上部)、やはり「書上帳」などが同時に書写されたと考えることができよう。また、これらを謄写した人物の名前も判明する。このうち、原別村については、

書上帳共

明治三十年十月 謄写 渋谷代太郎(印)

県庁御備付ニヨリ

とあるように、さきに紹介した雲谷村の「書上絵図」とおなじく、渋谷代太郎という人物が謄写を行っている。さらに、高田村・野沢村の「書

上絵図」については、成田浅之助という人物がこれを謄写している。このうち、高田村の「書上絵図」には、

青森県庁備付

貞享元年四月、高田村庄屋佐次兵衛外式名ヨリ弘前藩庁^江提出之地

図、

明治三十年十一月下旬、於東津軽郡役所謄写ス、

大野村長 神三蔵 (印)

委員 原子彦太郎

筆工者 成田浅之助(印)

とあるように、成田はやはり県庁に保管されている「書上絵図」を東津軽郡役所(以下、「郡役所」と略記する)で謄写している。しかも、村長・委員と称される人物が連署していることから、大野村が絵図の謄写を行った主体であるということががわれる。また、明治三〇年当時



図2 原別村「書上絵図」(部分) 青森市個人蔵

は高田村の大字となっていた野沢村についても、高田村とおなじく大野村長神三蔵らの署名があることから、これも大野村が実施したも

表4 明治30年に謄写の可能性がある資料

①書上絵図

| 組 | 村名 | 資料名 | 謄写日 | 謄写者 | 所蔵 | 郡役所印 | 備考 |
|-----|-----|---|------------|-------|--------|------|---|
| 浦町組 | 雲谷村 | 天和絵図 | 明治30年9月 | 渋谷代太郎 | 青森市個人蔵 | ○ | 『雲谷財産区史 おやすの里』(青森市雲谷財産区 2005年)に写真掲載 |
| | 高田村 | (青森県庁備付貞享元年四月高田村庄屋佐治兵衛外二名ヨリ弘前藩庁江提出之地図) | 明治30年11月下旬 | 成田浅之助 | 青森市個人蔵 | × | 鉛筆書 「明治三十年十一月下旬写す」 「大野村長 神三蔵」ともあり |
| | 野沢村 | (青森県庁備付貞享元年三月野沢村庄屋左右右衛門四郎外三名ヨリ弘前藩庁江提出之地図) | 明治30年11月下旬 | 成田浅之助 | 青森市個人蔵 | × | 「於東津軽郡役所謄写」「大野村長 神三蔵」などと有 |
| 横内組 | 原別村 | (原別村周辺絵図) | 明治30年10月 | 渋谷代太郎 | 青森市個人蔵 | × | 「県庁御備付ニヨリ謄写 書上帳共」とあり |
| | 炭石村 | 天和絵図 | 明治30年11月 | 渋谷代太郎 | 久栗坂町会 | ○ | 裏に「県庁御備付ニ付キ旧日記共」とあり |

②書上帳

| 組 | 村名 | 資料名 | 謄写日 | 謄写者 | 所蔵 | 郡役所印 | 備考 |
|-----|-----|--------------------------------|----------|-------|----------|------|------|
| 油川組 | 油川村 | 貞享元年 外浜下磯代官所油川村御蔵給地田畑屋敷其外諸品書上帳 | | | 青森市個人蔵 | ○ | |
| | 新田村 | 貞享元年 外浜下磯代官所新井田村御蔵給地旗屋敷諸品書上帳 | | | 青森市個人蔵 | ○ | |
| | | 貞享元年 外浜下磯代官所新田村御蔵給地田数書上帳 | | | 青森市個人蔵 | ○ | |
| 横内組 | 浅虫村 | 貞享元年 外浜下磯代官所浅虫村御蔵給地田数書上帳 | 明治30年10月 | 渋谷代太郎 | 青森市教育委員会 | ○ | |
| | | 貞享元年 外浜下磯代官所浅虫御伝馬新田畑屋敷書上帳 | 明治30年10月 | 渋谷代太郎 | 青森市教育委員会 | ○ | |
| | | 貞享元年 外浜下磯代官所浅虫御伝馬新田田畑屋敷書上帳 | | | 青森市教育委員会 | ○ | |
| | | 貞享元年 外浜下磯代官所浅虫漁師新田畑屋敷書上帳 | | | 青森市教育委員会 | ○ | 4冊合綴 |
| | | 貞享元年 外浜下磯代官所浅虫村御蔵給地田数書上帳 | | | 青森市教育委員会 | ○ | |
| | | 貞享元年 浅虫村御蔵給地畑屋敷其外諸品書上帳 | | | 青森市教育委員会 | ○ | |

③検地帳

| 組 | 村名 | 資料名 | 謄写日 | 謄写者 | 所蔵 | 郡役所印 | 備考 |
|-----|------|---------------------------|----------|-------|----------|------|--------------------------------------|
| 油川組 | | 貞享四年 田舎庄油川組村々見取場田畑地荒地漆木改帳 | | | 青森市個人蔵 | ○ | 付箋あり(文字が小さく読めず) |
| | 油川村 | 貞享四年 陸奥国津軽郡田舎庄油川村御検地式冊寄帳 | | | 青森市個人蔵 | ○ | 表紙に「御検地水帳式冊之内未老冊不見ニ付此寄帳アルニ付写シ置ク」との付箋 |
| | 十三森村 | 貞享四年 陸奥国津軽郡田舎庄十三森村御検地水帳 | | | 青森市個人蔵 | ○ | 表紙に「絵図及諸品書上帳ナシ」との付箋 |
| | 羽白村 | 貞享四年 陸奥国津軽郡田舎庄羽白村御検地水帳 | | | 青森市個人蔵 | ○ | 表紙に「絵図及諸品書上帳ナシ」との付箋 |
| | 新田村 | 貞享四年 陸奥国津軽郡田舎庄新田村検地水帳 | | | 青森市個人蔵 | ○ | |
| 横内組 | 浅虫村 | 貞享四年 陸奥国津軽郡田舎庄浅虫村御検地水帳 | 明治30年11月 | 渋谷代太郎 | 青森市教育委員会 | ○ | |

④その他

| 組 | 村名 | 資料名 | 謄写日 | 謄写者 | 所蔵 | 郡役所印 | 備考 |
|-----|-----|--------------------------|-------------|-------|--------|------|-----------------------------------|
| 横内組 | 浅虫村 | 旧弘前藩浦町・横内・油川・後潟四ヶ組秣場炭焼元帳 | 明治30年12月 | | | × | 東津軽郡役所 |
| | | 旧弘前藩 御領内諸山之内外浜通沢名元帳 | 明治30年11月ころ | | | × | 前書ノ通取調之上及御届ニ候也、東津軽郡野内村大字浅虫区長木村久太郎 |
| | | (東郡所々蔵山沢図) | 明治30年11月26日 | 成田浅之助 | 青森市個人蔵 | × | もう1枚、本図の下書きと思われる図あり |

(註) 青森市史編さん室が所蔵する行政文書に綴られている近世文書については本表には含めていない。

のとみてよいであろう。つまり、成田は絵図の謄写者として、大野村もしくは郡役所から委嘱された人物ではないかと推測される。したがって、さきの渋谷代太郎も成田とおなじく雲谷村・原別村もしくは郡役所の委嘱を受けた人物であろうことが推測される（渋谷については後述する）。

ここで注目すべきは、大野村がわざわざ近隣の高田村・野沢村の絵図の写しを作っていることである（ちなみに、大野村の「書上絵図」については、残念ながら確認できなかった）。さらに、大野村では、おなじく明治三〇年十一月に郡役所において、やはり成田の手によって郡役所に保管されていた「青森県東津軽郡所々蔵山沢図」（従荒川村領浅虫村領迄并村々仕立山）を謄写している（表4-④）。これらの絵図は、いづれも謄写された時期もおなじく明治三〇年十一月であることから、高田・野沢二か村の「書上絵図」と「青森県東津軽郡所々蔵山沢図」とはおなじ目的のために写されたものであると考えられるのではないだろうか。したがって、これら明治三〇年に写された一連の「書上絵図」は、いづれも山沢の調査にかかわるもの、とくに、近隣村の「書上絵図」をも写していることから考えると、山沢の境界とかかわるような目的で謄写されたのではないだろうか。

このほか、荒川村では、高田村とともに山林の下戻申請をすることになり、明治三〇年十一月二五日付で、農商務大臣山田信道に対して荒川村村長白鳥鴻章・高田村村長奥崎義郎の連名で申請書を提出している¹⁸。このときの申請書によれば、白鳥は当時郡参事会の一員で「常に郡衙等¹⁹に出入りし、種々の書類を展開するの便ありたり」という立場を利用して、郡役所で調査にあたったようである。

そして、白鳥は高田村大字小畑沢の近郷薪取山（明和年間）の史料を見つけ出し、そのほかにも、明治三〇年十一月二五日に、郡役所の倉庫で野沢村の「書上絵図」を発見して白鳥自ら筆写するなどしたという（なお、絵図面に関しては、その後「特別の筆者を雇入れ」たという²⁰）。白鳥が、郡役所倉庫で発見したという「書上絵図」は、さきにみたように県庁に保管されていた絵図であり、後述するように当時郡役所で借り受けていたものであると考えられる。このように、このころには山林の下戻に関わって、各村ではその証拠資料として、藩政時代の資料を調査していたようである。

さて、このように青森市域に属する村々で「書上絵図」の写しが作られる前年、明治二九年（一八九六）十一月三日付で、郡役所は各村に対して山林調査の指示をした（後掲「東第五九七七号」）。もちろん、このときの山林調査は、明治三〇年十一月七日付の『東奥日報』紙に、

◎山林原野調^{▲▲▲▲▲}

委員長担任して身自から其の取調に従事し居れる由、該調査は貞享年中の村受公有地なる民林を回復するの重なる取調へなりとも云ふ、と報じられているように、ひとり東津軽郡に限ったことではなく、津軽五郡全域に及ぶものであり、明治三〇年十一月二〇日ころまで調査が行われたようである。そして、このときの調査は「貞享年中の村受公有地なる民林を回復するの重なる取調」であるとも伝えることは、小稿において注目すべき点である。ここでは、青森市史編さん室が所蔵する「旧町村行政文書」のうち、青森市内西部地域の奥内村の「明治三十年事業関係書類綴」から、関係文書をみてみることにしよう（以下、とくに断

らない限り、奥内村に関する史料はいずれもこの綴によるものである。

東第五九七七号

津軽郡ニ於ケル一・二・三等官林ハ、從來御本山ノ概称ヲ以テ明治六年山林調査ノ際挙テ官林ト測定セラレタルモ、其幾部ハ村受公有地トシテ支配シタル個所モ有之候趣ヲ以テ改租当時ノ規定ニ遡リ民地ニ回復之義山麓各村长連署出願之次第モ有之候ニ付、旧弘前藩ノ記録ニ徴シ調査スルニ、村受地トシテ支配セシメ又ハ其村方ヲシテ所在森林保護ノ責ニ任シ之カ報酬トシテ未木・根柴・下草等ノ分収権ヲ与ヘタル等ノ慣行アルノ事実ハ、沿革上稍々確ムヘキ例証ナキニアラスト雖トモ、果シテ何レノ地盤ハ本山ニシテ何レノ個所ハ村受公有地ナルヤ明確ニ区別シタルモノ無之、此上調査進行差支候趣其筋ヨリ照会越候条、左記各項ニ基キ詳細調査ヲ遂ケ何分ノ回報相成度、此段及通牒候也、

明治二十九年十一月三十日

東津軽郡役所(印)

奥内村长殿

調査要領

一、村受公有地ト認ムヘキ地盤区画図及字・番号・反別調、是ハ貞享^(註)検地帳及天和書上絵図・村控旧記等ニ照シ、之ニ該当スヘキ現地区域ヲ画シ、而シテ抱山・見継山等ニ転換セシモノ、若クハ其素地ハ野山ナルモ森林ニ変化セシ等ノ事実・沿革ヲ挙ケ、現在ノ地域・四至ノ境界・反別・番号及居住地ヨリ距離等ヲ調査付記スヘシ、

一、同上地域内ニ於ケル木種・員数・目通り尺回・束数調、

是ハ一筆、若クハ一区画ニ自生木ノ保護・培養又ハ栽植等ノ
大要ヲ摘記スヘシ、

一、純然タル御本山ニシテ未木・根柴・下草等分収ノ慣行アルモノ
ハ前二項ノ例ニ依リ調査シ、之ニ其事実ヲ例証スヘキ沿革及分収
ノ歩合ヲ摘記スヘシ、

一、調査ニハ各村长ノ記名・調印ヲ要ス、

これによると、明治六年(一八七三)の山林調査の際に官林に指定された山林のなかに、村受地であつたものが含まれていたという。そして、この村受地については「民地ニ回復之義山麓各村长連署出願之次第モ有之候ニ付」とあるように、山麓の各村长の連名で民有地への回復の願いが出されていた。しかしながら、官民の区別を明確にすることが難しいことから、改めて調査することになったのである。^(註)

そして、ここで注目したいのは、文書後半部の「調査要領」の第一条である。これによれば、村受地として認められるべき土地については、

「貞享^(註)検地帳及天和書上絵図・村控旧記等ニ照し」とあるように、「検地帳」や「書上絵図」などに照会して調べることが求められていることである。さきに述べたように、「書上絵図」の写しを作成するにあつて、同時に「書上帳」などが写されているのも、基本的にはこの第一条によるものと考えられる。具体的に表4-②③でみてみると、少なくとも渋谷代太郎が謄写した、浅虫村の「書上帳」二冊と「検地帳」一冊はこの山林調査に絡んで写されたのはほぼ確実であると考えられる(なお、後掲の史料から、浅虫村の「書上絵図」は謄写されなかったことが分かる)。このほか、明治二二年(一八八九)の町村制施行により油川村に^{あぶらかわ}

編入された十三森村・羽白村・新田村と油川村についても、たとえば、十三森村・羽白村の「検地帳」の表紙の付箋に「絵図及諸品書上帳ナシ」とあることに加え、後述のように、油川村では明治三〇年度予算のなかに絵図を作成するための予算を計上しており、いずれもこのときに写された蓋然性は高いと思われる。

ただし、実際の調査の方はこれだけでは十分に進めることができなかったのか、翌明治三〇年三月に、郡役所は各村に対して再度この調査の件について通達を出した。

東第一〇〇五号

津軽五郡ニ於ケル山林調査之儀ニ付、其事項ヲ相添廿九年十一月三十日東第五九七七号ヲ以テ及通達置候処、右其筋照会之上取調手続別紙之通相定候条了知可有之、尤手続書中天和・貞亨之図書類ハ当庁へ借受置候都合ニ付借受次第更ニ通知可及候ニ付謄写方可申出、此段再応及通達候也、

明治三十年三月三日

東津軽郡役所（印）

奥内村長殿

村受公有地ト認ムヘキ地盤区画図及番号・反別取調手続

一、貞亨ノ検地帳及天和書上絵図ニ依リ取調得ルモノハ、県庁備付

天和ノ絵図并貞亨ノ検地帳ニ基キ、明治九年改租山林原野々帳ニ対照シ取調ルモノトス、但本項絵図アルモ其地所ニ依リ符合セサル個所ハ旧来ノ慣行ニ依リ取調ルモノトス、

一、天和ノ絵図・貞亨ノ検地帳ナキモノハ、旧来ノ慣行ニ依リ其村

落ノ村受トシテ、進達シタル事蹟アルモノハ其区域ヲ定メ取調ルモノトス、

抱山・見継山等ニ転換セシモノ、若クハ其素地ハ野山ナルモ森林ニ変化セシ等ノモノハ、可及丈其事実・沿革ヲ挙ケ、現在ノ地域・四至ノ境界・反別・番号及居住地ヨリノ距離等ヲ調査附記スルモノトス、

一、前項々地域内木種・員数・目通尺回・束数調手続、

一筆、若クハ一区画ニ自生木ノ保護・培養又ハ栽植等ハ檜・

杉・松等種類ヲ分チ、雑木ハ総テ目通一尺回已上何尺回迄何

百何十本、一尺回以下小柴トシテ（老丈縄）何百何十束ノ概

数ヲ調ルモノトス、但保護・培養・栽植等ハ実地ニ就キ大要

ヲ調ルモノトス、

一、御本山ノ内ニシテ未木・根柴・下草等下与シタル慣行アル個所

及官民共栽培ニ係ル個所ハ、前項々ノ例ニ依リ調査シ、之レニ其

事実ノ例証スヘキ沿革及其歩合ヲ記スヘシ、

これによれば、「検地帳」及び「書上絵図」を基礎資料として調査を行ふことになっていることは、前年十一月の「東第五九七七号」と変わらないものの、この通達の後半の「村受公有地ト認ムヘキ地盤区画図及番号・反別取調手続」の第一条「但本項絵図アルモ其地所ニ依リ符合セサル個所ハ旧来ノ慣行ニ依リ取調ルモノトス」と、第二条「天和ノ絵図・貞亨ノ検地帳ナキモノハ、旧来ノ慣行ニ依リ其村落ノ村受トシテ、進達シタル事蹟アルモノハ其区域ヲ定メ取調ルモノトス」とあるように、「旧来ノ慣行」による調査も認められることになった。また、併せて明

表5 「山林ニ関スル従来ノ慣行縁故調査表」で書写された近世文書

| 年 代 | 史 料 名 | 備 考 |
|--------|---|-----------------|
| 寛政2年5月 | 御領内諸山之内外ヶ浜沢名元帳 | 前田村領船ヲロシ沢ほか |
| 寛政2年5月 | 御領内諸山内外ヶ浜通沢名元帳 | 前田村領砂附道沢 |
| 元治元年8月 | 天保十三寅年御済口 後潟組前田村領開発ニ付足水新溜池 水門新規御渡方願調帳 | |
| 慶応3年7月 | 後潟組前田村御本山沢預り書上帳 | 2部 御本山湯之沢 上平通ほか |

治九年（一八七六）の山林調査による「野帳」と対照させて調査を行うことにもなっている。⁽²⁴⁾

綴⁽²⁵⁾」を作成しているが、この綴はまさにここでの指示を受けて作成されたものであるといえる。そして、それには

役場に備え付けの明治九年九月の帳簿（この帳簿が、明治九年の「野帳」に相当するものと思われる）を根拠として、「村中持」の山沢の証明願を提出した、奥内村字内真部^{うちまへ}総代人の文書などが綴られている。さらに、この綴には「旧弘前藩事務係永沢孫三郎保存」による「明和三年丙戌年より年々諸木植付并見継山留牒」といった文書など、藩政時代における山林関係の文書の写しなども綴られている。

つまり、調査の対象が「旧来ノ慣行」にまで及ぶことにより、結果として各村が写し取った文書の範囲が広がることになったようである。さらに、奥内村が「旧来ノ慣行」に基づいて作成したものに、「山林ニ関スル従来慣行縁故調査表⁽²⁶⁾」という綴がある。この綴は、藩政時代の前田村領^{まえだ}の分のものであり、表5に示したようにのべ五点

の近世史料が書写されている。このうち、二冊の「沢名元帳」は前田村にかかわる部分の抜粋であるが、このほかは全文が書写されている可能性が高い。

野内村でも、表4-④にあるように、浅虫村の「沢名元帳」などが「大字浅虫区長」名によって謄写されている。なお、後述のように、野内村では資料の謄写は、その費用負担を含めて大字を単位として行うことになっていた。「大字浅虫区長」名で謄写がなされたのはそのためであると考えられる。したがって、さきにみた大野村の「青森県東津軽郡所々蔵山沢図」の謄写についても、この文脈で読み取ることができよう。その意味では、落ち穂拾いのような作業ではあるが、これら行政文書などを博搜することにより、現在では失われた文書をみつけたすこともあるように思われる。⁽²⁷⁾

さらに、郡役所では、「尤手続書中天和・貞亨⁽²⁸⁾之図書類ハ当庁へ借受置候都合ニ付借受次第更ニ通知可及候ニ付謄写方可申出、」とあるように、「書上帳」や「検地帳」などについては、郡役所が県庁から借り受けることになっていることが分かる。さきの大野村などの例にもあるように、県庁備付の文書を郡役所で写したのはこのためであった。

三 「書上絵図」の謄写と郡役所の証印

「書上絵図」写しの作成については、郡役所が各村に対して通達したさきの文書（東第一〇〇五号）とおなじく、三日三日付でつぎのような文書を出している。

東第一〇〇■六号

三月三日東第一〇〇五号ヲ以及通達候天和・貞享ノ図書類、旧後潟組丈当庁へ借入置候間、山包^(ヤマ、以下同)膳写方申出候得者出願可為致、若山包出願為致無候ハ、他組ニ属スル村々膳写ノ差間ニモ相成候儀ニ付、当庁於テ相応ノ者ニ膳写セシメ候而も不苦候ニ付、追而筆耕料本人ニ支払方可取計、右両様共山包回報可□之、此段申入候也、

明治三十年三月三日

東津軽郡役所（印）

奥内村長奥谷勝太郎殿

これによると、藩政時代の「組」を一つの単位として、郡役所が県庁から史料を借り受けて、各町村による膳写の希望を募っていることが分かる。また、膳写に際しては「当庁於テ相応ノ者ニ膳写セシメ候而も不苦候ニ付」と、郡役所において相応の人物を斡旋しており、その筆耕料については町村が負担することになっていた。そして、「書上絵図」の膳写作業は、実質的にはこの三月三日付の二つの文書（東第一〇〇五号及び東第一〇〇六号）が契機となったと思われる。たとえば、油川村では、三月二八日の村議会で決議された、明治三〇年度の村税歳出予算議案に、役場費のなかに備品費として「拾一円官報及其他書籍ヒ、五円書籍入ノ函二個、三円絵図調製費」として予算が計上されている。⁽²⁸⁾ もちろん、この「絵図調製費」が「書上絵図」の膳写費用であったと速断することはできないものの、郡役所から各村に出された、これら三月三日付の二通の文書の時期を考えあわせると、その可能性は高いものと思われる。

さて、つぎに青森市内東部野内村^{のな}の事例から、膳写の実態についてみ

てみることにしよう。野内村は、明治二二年の町村制の施行により、藩政時代の野内村・久栗坂村・根井村^{ねい}・浅虫村の四か村から成っていた。そして、明治三〇年当時は、野内・久栗坂・浅虫の三つが大字となっていた（根井村は明治九年ころに久栗坂村の一部となったという）。野内村では、明治三〇年九月二二日の村会で、「天和及其以后ノ旧帳膳写ニ付テハ各大字ヨリ出頭シテ、其費ノ如キモ各大字ノ負担トス、」とあるように、「書上絵図」などの膳写に関しては各大字単位で行い、その費用も大字で負担することに議決している。⁽²⁹⁾ そして、野内村全体では「書上絵図」のほか、つぎの文書を膳写した。⁽³⁰⁾

旧記及絵図膳写ニ付明細調印

| 帳数 | | 紙数 | |
|-------|-----|----|---------|
| 野内水帳 | 式 | 式 | 五百五十四 |
| 同 書上 | 六 | 式 | 百四十四 |
| 久栗坂水帳 | 式 | 式 | 七十 |
| 同 書上 | 十二 | 式 | 九十八 |
| 根井水帳 | 式 | 式 | 十八 |
| 浅虫水帳 | 式 | 式 | 七十四 |
| 同 書上 | 十 | 式 | 八十二 |
| 滝沢書上 | 四 | 式 | 四十 |
| 計 | 四十冊 | 式 | 七百八十枚半紙 |
| 野内図 | 式 | 式 | 十八 |
| 久栗坂図 | 式 | 式 | 二十六 |
| 滝沢図 | 式 | 式 | 四十 |

計 六 八十四枚薄美濃紙
此諸費

一、金七円八拾銭

諸帳四十冊謄写
繪図六枚同
古六枚図繕ヒ□□□□テ突合ス

日数
廿日
四日
二日

計二十六日間

一、金壹円貳拾壹銭五厘

半紙実費

八百十枚
則四束十枚
巻束代三拾銭

一、金三拾五銭

バン水引美濃紙実費

貳ヶ折
九十六枚巻折ニ而拾七銭五厘

一、金六銭五厘

水彩絵ノ具

計九円四拾三銭

右之通候也、

明治三十年十一月十日

渋谷代太郎印

前書之金員正ニ受取候也、

明治三十年十一月十六日

渋谷代太郎印

ここに見える「水帳」「書上」「図」というのは、それぞれ、「検地帳」「書上帳」「書上絵図」に相当するものと思われる。そして、概ね各大字ともにこれら三つを一セットにして謄写しているということができよう。また、「検地帳」「書上絵図」はそれぞれ二部ずつ謄写されていることから、二組作成されたものと考えられる。

一方、「書上帳」については、たとえば浅虫村についていえば、表4-①にあげた「書上帳」の表紙に「四冊ノ内」とあることから、四冊で構成されていることが分かる。そして、渋谷代太郎が謄写した「外浜下



図3 荒石村「書上絵図」裏面 久栗坂町会蔵

ある。「検地帳」「書上絵図」が二組作成されるのは、一つが郡役に所納める分で、もう一つを村の控えだとすれば、浅虫村のばあいは、四冊のうち、二冊が「村控古帳」としてあるので、六冊謄写すれば済むのではないかと考えられる。しかし、実際は十冊謄写されており、もう一組分謄写されたと考えれば十冊の理解はできるが、「書上帳」のみ三組作らなくてはならないとする理由は分からない。

磯代官所浅虫村御蔵給地田数書上帳」の表紙に貼られた付箋によると、この四冊のうち「浅虫漁師新田畑屋敷書上帳」と「浅虫村御蔵給地畑屋敷諸品書上帳」の二冊については、「右村控古帳アルニ付、郡役所納ノ分のミ謄写」と

さらに、根井村は、「検地帳」のみを謄写している。この理由は、根井村は久栗坂とともに、「天和書上」が作成された天和四年当時はいずれも箆石村の枝村であったことによる。⁽³¹⁾ また、図3としてあげたように、箆石村の「書上絵図」の裏面には、

笑石村⁽³²⁾

家数式拾四軒

内

拾九軒本村

ざる石

庄屋 小右衛門 印

へみ塚

庄屋 覚兵衛 印

くもり坂

庄屋 孫左衛門 印

五本やす

庄屋 仁左衛門 印

壱軒

とあり(図2)、箆石村には、根井・久栗坂のほかにも、へみ(蛇)塚・五本やすという枝村も存在していたことが分かる。したがって、久栗坂の「書上」と「久栗坂図」は、いずれも箆石村のそれであり、ここに根井・久栗坂二か村の分が含まれているということになる。

なお、久栗坂村は、元禄七年(一六九四)に村名が変更されており、箆石村が根井村に、根井村が久栗坂村となっている。⁽³³⁾ そして、村名変更の理由は、箆石村は新村であるために「検地帳」には記載されず、一方、久栗坂村は「貞享の検地帳」には記載されているものの田畑がなく存立しがたいため、国絵図に村名が記載されている根井村の名前を利用して、生産基盤を持った村として整理しようとしたためであるという。⁽³⁴⁾

また、箆石村の「書上帳」は現在五冊が確認されているが、これらの表紙には「七冊之内」とあり、本来七冊で構成されていることが分かる。

謄写されたのは十二冊であることから、当時すでに一冊欠けていて、六冊を二組謄写したということなのだろうか。

さらに、野内村では隣村滝沢村の「書上絵図」なども謄写している。

これは、さきにみた大野村が高田村・野沢村の「書上絵図」を謄写したのとおなじ理由であると思われる。そして、滝沢山は、享保六年(一七二一)に野内村の「御利分山」となったといったことが関係があるのかもしれない。⁽³⁵⁾

さて、これら野内村の「書上絵図」などを謄写し、その費用九円余りを受け取った人物は、さきに雲谷村・原別村の「書上絵図」を謄写した人物として示した渋谷代太郎その人であった。表4に示したように、渋谷は、少なくとも藩政時代の四か村分の資料の謄写にかかわっていることが確認できる。おそらく、渋谷は、三月三日付で郡役所から出された文書(東第一〇〇六号)のなかにみえる「相応ノ者」であり、郡役所から謄写者として斡旋された人物であるものと思われる。

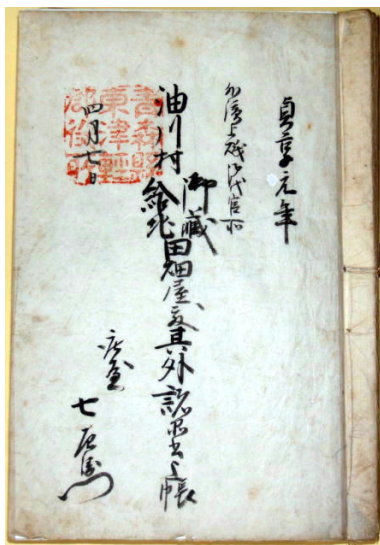


図4 油川村「書上帳」表紙
青森市個人蔵

さて、渋谷が謄写した「書上絵図」及び「天和書上」には、表4及び図1の右下隅や図3の左上部に

みえるように、「青森県東津軽郡役所」という朱の角印で押印がなされているものが多い。これに関して、野内村では、

〔達第弐号〕
朱書

今般本県備付ノ旧記・図書共、当野内村各大字ニ係ル分騰写セシメテ本郡長ノ証明ヲ得タルモ、其証書ハ一紙ニシテ当役場へ備置、後証ノ為別紙騰写ノ上其大字へ配付候条、保存方取計ハルベシ、

明治三十年十一月十三日

野内村長秋庭吉弥

浅虫区長木村久太郎殿

とあるように、⁽³⁶⁾ 騰写した資料に対して郡長からの証明を得てその証書は役場に備え付け、各大字にはその写しが配付されている。さらに、野内村で騰写した文書四〇冊と「書上絵図」六枚については、つぎにみるように、それぞれに郡役所の印（「庁印」）が捺された。⁽³⁷⁾

証明願

別紙野内村御検地水帳巻冊外四拾巻冊⁽³⁸⁾及絵図六枚ハ、本県備付之旧記・図書ニシテ御庁ニ於テ借入候分より騰写シタル旨御証明被成下度候也、

明治三十年十一月十二日

東津軽郡

野内村長

秋庭吉弥

同郡

野内村取入役

和田良稔印

東津軽郡長小島伝次郎殿

指令第三二七号

願之趣聞届ケ各図書ニ庁印ヲ捺ス、

明治三十年十一月十二日

東津軽郡長小島伝次郎 印

ここで捺された「庁印」は、「本県備付之旧記・図書」を騰写したこと
の証印であつた。野内村のほかにも、表4及び図4から分かるように、
油川村でも「書上帳」などにこの「庁印」を請けている。油川村の各村
については、いづごろ誰が資料の騰写を行ったかは分からないが、野内
村とおなじように、史料の写しを作成して郡役所の証印を請けたものと
考えられる。

むすびにかえて

青森市内で確認できた「書上絵図」は、以上のような経過を経て騰写
が行われ、現在に伝えられたものである。さきに述べたように、騰写は
郡役所が県庁から藩政時代の「組」を単位として借り受けたもので行わ
れた。青森市域が属する外浜四か組についていえば、奥内村を含む^{うしろ}後
潟組^{がた}の分については、三月初旬に郡役所に借り受けられていることが判
明する。そのほかの組については分からないものの、騰写の日付から判
断すると、浦町組（九一十一月）、横内組（十一十一月）の順となりそ
うである。とくに、浦町組については、白鳥鴻章が目になっているように、
十一月二五日の段階ではまだ郡役所にあつたようである。油川組につい
ては、まったく手がかりがないものの、山林調査が十一月末には終了し
ていることを考えると、後潟組のつぎに借り受けられたものと考えられる。

が妥当かと思われる。そして、おそらくは東津軽郡以外の四郡においても、おなじような手順で調査が行われたのではないかと考える。

加えて、明治三〇年三月には、「書上帳」「書上絵図」などのほかに、「旧来ノ慣行」によっても山林調査を行うことができるようになり、その結果として、藩政時代の山林関係の文書も広く書写されることになった。このことは、「書上絵図」「書上帳」にとどまらず、現在では失われてしまった文書を発掘できる可能性を示唆するものである。

また、青森市域においては、昭和四〇年代初めころまでには、何らかのかたちで「書上絵図」が存在し、それが「町村誌」「郷土誌」のなかで紹介されてきた。そして、「書上絵図」は「書上帳」「検地帳」との三点セットで、近世前期の各村落の歴史叙述には欠くことのできない基本資料であったことがうかがわれる。こうした「書上絵図」「書上帳」などが現在どうなっているのかは分からないが、今後発掘され、一般の閲覧に供されるようになることを期待したい。³⁸⁾

註

- (1) 『青森県史』資料編近世2（青森県、二〇〇二年）では、この「書上帳」の例として大光寺組本町村のものを掲載している（二四九号文書）。青森市内では、油川組では油川村・新田村の二か村、横内組では浅虫村・笹石村の二か村の計四か村の「書上帳」が確認されている。このうち、油川村と笹石村の二か村分については、『新青森市史』資料編5近世(3)（青森市、二〇〇六年、二〇一五号文書）に掲載されている。これら二か村の「書上帳」と本町村のそれを比較してみたとき、油川・笹石両村の「書上帳」には各村の由緒が書かれていることが特徴である。

なお、浅虫村の「書上帳」については、浪川健治・魚川江美子「近世浅虫の生産環境と居住空間」『市史研究あおもり』6、二〇〇三年）で、詳細な分析がなされている。

- (2) 前掲『青森県史』資料編近世2、二四八号文書。
- (3) 長谷川成一「津軽氏城跡の発達過程を探る基本資料の基礎的考察―弘前并近郷之御絵図」と「天和書上絵図」―（平成15年度～平成17年度科学研究費補助金 基礎研究（C）（2）研究成果報告書『津軽氏城跡の発展過程に関する文献資料と遺物資料による研究』 研究代表者長谷川成一、二〇〇六年）。
- (4) 青森県立図書館蔵マイクロフィルム。
- (5) (3) におなじ。
- (6) (3) におなじ。
- (7) 小稿における「青森市」という概念は、二〇〇五年（平成十七）に浪岡町と青森市とが合併する以前の青森市を意味している。
- なお、浪岡町の「書上絵図」については、『浪岡町史』第二巻及び別巻I（浪岡町、二〇〇二―二〇〇四）でのペー〇点（目録掲載分も含む）を紹介している。このうち、別巻Iでカラー写真で掲載されている四日町村・九日町村の二か村の「書上絵図」については、「明治から大正にかけて県庁文書の中から写したものと思われる（原資料からの写しからかは不明）」という説明が付されている。
- (8) (3) におなじ。
- (9) (3) におなじ。
- (10) 「リスト」のNo.48「石郷村絵図模写」は、「石江村」の誤記の可能性があるのでないかと考えている。
- (11) 本書は、平成六年（一九九四）に複製版を発行しているが（筒井小学校オーブンスクール運営委員会・筒井小学校父母と先生の会研修委員会

発行)、複製版の方では幸畑村の「書上絵図」を欠いているようである。

- (12) 青森市内の「検地帳」は、最近発見された油川組三内村の分を含めて九四か村分が知られている。

なお、この九四か村個々の検地帳については、前掲『新青森市史』資料編5近世(3)にデータ化して掲載している。

- (13) 本書は、昭和三十一年(一九五六)に、前年の青森市との合併を機会として再編されており(二冊の『荒川村誌』を一冊に合本)、小稿ではこの再編版を用いた。

- (14) 前掲『新青森市史』資料編5近世(3)、第一章解説(浪川健治氏執筆担当)。

- (15) (3) におなじ。

- (16) 青森市雲谷財産区発行、二〇〇五年。

- (17) なお、本図は『青森市史』第五巻産業編(下)(青森市、一九五六年)に複製が附録として収められている。

- (18) 高田財産区史編纂委員会『高田財産区史「おらだちの山」』(青森市高田財産区、一九八七)。

なお、白鳥の山林運動解放運動に関する史料については、末永洋一「白鳥鴻章と山林解放運動に関する資料について」(『市史研究あおもり』2、青森市、一九九九年)に詳しい。

- (19) 同右。

申請書は、右の末永稿で紹介されている『青森県東津軽郡荒川村高田村山林勝訴録』に収められているようであるが、小稿では前掲『高田財産区史「おらだちの山」』の資料編(六三―六五ページ)に収められているものを用いた。

- (20) 同右。

- (21) (4) におなじ。

ちなみに、北津軽郡においても、明治三〇年十一月二五日付の『東奥日報』紙は、

●村長会議 北津軽郡にては対馬前郡長就任の際村長を招集して会議を開かんとしたるに、対馬氏は俄然非職となり後任郡長の赴任なきより止むを得ず、一旦は該集会を取消することとなりしが、各村に於ける官地山林原野等の取調期限は刻下に迫り、各村長等に於て之が取調上の集会は最も必要なるを以て各村長より集会の開催を郡役所に請求したるに、黒田新任郡長は本月十五日赴任し、翌十六日同会議を開設したが、提出問題は官地山林及原野等の取調に関する件にして、黒田郡長会長となり種々会議を凝らし、翌十七日を以て結了を告げたる由、

と報じるように、新任の郡長のもと、十一月十六・十七日に郡内の村長を招集して「官地山林及原野等の取調に関する件」で会議を開催している。

- (22) なお、本文書群の名称は『新青森市史』資料編7近代(2)(青森市、二〇〇六)によった(同資料編6近代(1)では「旧青森市役場文書」とされている)。しかし、この文書群には青森市役所のほか、これら「旧町村」が青森市に合併された後に設置された出張所・支所の文書、さらには青森市外の役場の文書、行政文書と積極的に評価するには躊躇されるものなども含まれている。その点で、この文書群は、その名称のみならず、個々の文書の再整理など現段階における課題は多いといえる。
- (23) 明治期における青森市域の山林官民区分問題については、『新青森市史』資料編6近代(1)(青森市、二〇〇四年)二三―二六号文書をご覧いただきたい。

- (24) この「野帳」は、青森市史編さん室蔵「旧町村行政文書」によれば、「山林原野等実地丈量番繰野帳」という名称のものであり、現在奥内村

・飛鳥村・内真部村・前田村の四か村分が保管されている。

(25) 青森市史編さん室蔵。

(26) 青森市史編さん室蔵。

なお、この「旧来ノ慣行」による調査報告に関しては、『五所川原市史』史料編3上巻（五所川原市、一九九六年）二五二号文書にも史料が掲載されており、これを奥内村のそれと比較したとき、当然のことではあるが、統一書式で作成されていることが分かる。

(27) たとえば、奥内村の行政文書のなかに明治三十一年に作成されたと思われる「瀬戸子山林入会関スル書類」という綴がある。この綴は、大字飛鳥の住民が大字瀬戸子にある蘆喰沢と沼子沢の二つの沢が、藩政時代の飛鳥村・瀬戸子村二か村の入会地であったことの調査を郡長、さらには奥内村長から青森県知事へ願ひ出るための証拠書類を綴ったものである。大字飛鳥の住民が、明治三〇年十二月十五日付で郡長へ提出した申立書には、寛政二年五月の「御領内諸山之内外浜通沢名元帳」から蘆喰沢・沼子沢の二沢の部分を書したもののほか、文政四年に瀬戸子村の庄屋と飛鳥村の庄屋との間で取り交わした「山一件和合談文之事」という文書の写し、さらには、年代の判明するものでは万延元年から明治六年までの文書の写し（いずれも部分）など、都合一四点の文書の写しを作成して提出している。

このほか山林調査以外にも、見継山の共有権に関する争論でも、

村会開会之儀ニ付願

東津軽郡奥内村大字内真部地内旧称中沢ヨリ衛門佐沢マテ見継山にて候所、別紙甲第壹号証・同第貳号証写之通り安永年中より私共村方則チ現今奥内村大字清水「及」同大字内真部、後潟村大字左堰ノ共有「見継」山ニ相違無之候処、乙第壹号証写之如ク明治十二年九月ヨリ内真部単独ノ見継山ト相成、全ク其共有權ヲ侵害被致

居り候ニ付、左堰人民ト協議之上古来ノ通り三大字ノ共有山ト被致度旨内真部惣代人ニ屢交渉致し候得共、何分相整ヒ不申、權利上不得止次第ニ付、更ニ左堰ト協議之上大字左リ堰所屬後潟村長并大字清水所屬奥内村長ヨリ、大字内真部所屬奥内村長ニ係リ見継山共有權回復ノ訴訟提起致候事ニ相極メ候処、後潟村会ニ於テハ既ニ出訴スル事ニ議決相成候趣き左リ堰ヨリ通牒相成候間、本村ニ於テモ右共有見継山タルノ判定ヲ求ムル為メ訴訟提起スル議決ノ為メ、御手数之段恐縮之至リニ奉存候得共、至急村会儀開会被成下度、此段奉願候也、

明治三十年七月廿一日

内村大字清水惣代人

赤田長之 印

重立 松村忠次郎印

(以下、八名略)

奥内村長

奥谷勝太郎殿

とあるように（青森市史編さん室蔵「明治三十年会議関係書類綴」、藩政時代の文書をその証拠としている。また、ここで「甲第壹号証」とされるのは、「旧弘前藩事務係永沢孫三郎保存」の「明和三丙戌年より年々諸木植付并見継山留牒」という文書である。このように、明治期の山林問題、とくにその権利関係が藩政時代のそれにさかのぼることにより、結果として藩政時代の文書が書写されることになった。

(28) 青森市史編さん室蔵「明治卅年度村会議決書綴」。

(29) 青森市史編さん室蔵「明治三十年野内村村会議録」。

(30) 青森市教育委員会蔵。

(31) 前掲『新青森市史』資料編5近世(3)二二―二五号文書。

(32) 弘前市立弘前図書館蔵津軽家文書「弘前藩庁日記 御国日記」(以下、「国日記」と略す) 元禄七年九月二七日条につぎのようにある。

一、外浜下礮久栗坂村名替候義詮義可仕旨被仰出之、佐藤源太左衛門・武田源左衛門方^江相尋候所、左之通覚書左記之、

笑石村^⑧

根井村と改、但根井村ハ御絵図ニ有之、

根井村

久栗坂村と改、但久栗坂村ハ御本帳ニ有之、

右笑石村新村ニ而御本帳ニ書出不申、久栗坂村ハ御本帳ニ書出候得共、田畑無之末々難相立、且又村名右之通改候得者村順も能候段、御新檢之節武田源左衛門・田口十兵衛得相改申上候处、大道寺隼人・間宮十太夫被相窺、右之通被仰付旨申出之、

(33) (14) におなじ。

(34) (31) におなじ。

(35) 「国日記」享保八年六月九日条。

(36) 青森市教育委員会蔵。

(37) 青森市教育委員会蔵。

(38) 長谷川成一氏は、「今後の天和絵図研究においては、庄屋保管分の控図であつた同絵図をいかに捜査・発掘し、その保管・保存、さらにはどのように閲覧に供するかなど、捜査の努力と保存・閲覧のシステム作りが急務であろう。」と指摘する(註(3)におなじ)。史料の捜査、保存・閲覧のシステムについては、「天和絵図研究」にとどまらず、たとえば、現在でも自治体史編さんの事業が継続している各自治体にとつても、事業終了後の収集資史料の受け皿の構築という点でやはり急務の課題ではないだろうか。

(くどう・だいすけ 青森市史編さん室非常勤嘱託員)